

漕ぎ手なき舟にて漂うて

—海に葬送される王者たち—

水野知昭

船葬墓と水辺の葬地

北欧では石器時代より、水辺の地が死者の葬送の場であった。たとえば環状列石（クロムレックまたはドルメン）は、「つねに海に近いところに造られており、海岸から7マイル以上離れることは極めてまれである」とされる。他の墳墓、たとえば、羨道式石室墓、（墳丘で覆われた）石棺、また時には環状列石が内陸部に築かれている場合もあるが、「ほとんどつねに海につながる湖や川の近傍の地」が選ばれているという¹⁾。

また、前期青銅器時代に導入された火葬が、後期青銅器時代（前1200-600年）には土葬をしのぐ勢いで盛行をきわめるにいたったことが知られている²⁾。しかし、そのような葬法の一大変換にもかかわらず、葬送の地は、前時代の伝統を受け継ぎ、墓や石塚（cairns）は一般に小高い丘や岬など、「視界をさえぎることなく、海または湖を見渡せる場所」を選んで築かれているという。分布状況から、バルト海やカッテガト海峡（Kattegat：ユトランドとスウェーデンの間）の近辺に住む海洋民の葬地とみなす学者もいる³⁾。

ユトランド半島やデンマーク各地の島々の墳丘から、オーク製の木棺がしばしば出土している。副葬品として当時の武具や黄金や青銅製の装身具を周囲に配し、死者は日常の衣服を着たままで、その遺体は牡牛の皮でくるまれている⁴⁾。考古学者はこれらの原始人を便宜的に「マウンド（墳丘）人」と命名しているのだが、マウンドは、「海やフィヨルドを見渡せる、ひらけた丘に沿って、あるいはたとえ内陸部であっても、航行可能な水路に沿うところに位置している」とされる⁵⁾。

後期青銅器時代には、大きな岩石を船の形で配し、野原や林の中のひらけた地に突き立てる、という新しいモニュメントが出現しており、同じ慣行が鉄器時代の初期まで継続している。H・シェテリィやH・ファルクのような考古学者は、これらの船形石造墓は「死者が海のかなたに旅立つ」という信仰より発しているのだろう言っている。その推定は基本的に正鵠を得ているだろう⁶⁾。

さて、簡略ながら北欧の原始時代の葬法を通観してみた。その変遷にもかかわらず、「死後の靈魂が（海のかなたの）霊地へ向けて旅をする」⁷⁾、という宗教的なイデオロギーは連綿と生きつづけてきたように思える。それゆえに、たとえばデンマークの始祖王シュルドが逝去ののちに、寵臣たちが王の生前の意思に従い、その遺体を舟に載せて海のかなたへ葬送する話と、バルドルを葬送する船フリングホルニに火葬の薪が積まれ、並み居る神々や巨人族たちの見守るなかを、燃えながら海の藻屑となるという神話は、さほど差異があるとは思えない。そして、生前に死者が愛用した船もろとも大地の中に埋葬するという船葬墓の慣行に

も、多分に類似した古代思想を想定できるだろう。

スカンジナビア各地の船葬墓は、6-7世紀頃、スウェーデンのウップランド地方を中心に全域に広まったという見方が支配的であったが、M・ミューラー＝ウィッレは、スウェーデン最古のヴァルスエーデ (Valsgårde) の船葬墓よりも古い遺跡が数多くあることから、こうした従来の見解に対して否定的である⁹⁾。そのひとつの代表例は、バルト海のボルンホルム島の南部スルーセゴー (Slusegaard) の船葬墓である。1958-64年にデンマークの考古学者クリント・イェンセンによって発掘調査がなされて以来、およそ1,400の葬地を含む、最大級の規模を有する船葬墓として一躍脚光を浴びたことでよく知られている。このうち、43の葬地には、死者のそばにそれぞれ完璧な一艘の船あるいは船の一部が埋められていた。クルムリン＝ペデルセンによると、スルーセゴー船葬墓の構築年代に応じて、紀元1世紀から4世紀後半まで7期に区分され、第3期の紀元後80-160年に33例集中しており、その後減少する傾向が見える。しかし、第5期の後半、250年前後になると6例となり、短期間だが風習が再燃しているように見えるという⁹⁾。

スルーセゴーに葬られた人物の性別が判明しているのは21例で、うち10名が女性、他が男性であり、数の上ではほぼ男女均等だが、最大級の船葬墓は男性に供用され、石組みも特異である。遺体が茶毘に付される場合と埋葬される場合がある。考古学の精査によれば、埋葬墓が467例であるのに対して、火葬は全体で928例を数えるという¹⁰⁾。きわめて興味深いことに、埋葬された場合、船は北・南、または北東・南西に布置されている。この特徴について、A・W・ブロッグゲルは、人は死後、南方に思念されたヴァルホルム、もしくは北方のおぞましき国ヘルへ行く信じられていたのだらうと推測した。バルト海はゴットランド島の幾つかの画像石に、船に乗る人々の姿が描かれている。民族移動期やヴァイキング時代のルーン石碑に刻まれた絵画は、「碑文の内容とは無関係で、むしろ神話の主題を援用したものが圧倒的に多い」と言われている。ルーン石碑にしばしば船が描かれていることについては、「死者をあのに運ぶ船」と解釈されている¹¹⁾。

しかし、船葬墓の目的とその背景に横たわる思想について、近年、より興味深い幾つかの説が打ち出されている。たとえば、M・ミューラー＝ヴィレは、「豊饒を司る神が春先に船に乗って来着し、秋季に去ってゆく、という豊饒力崇拝がひそんでいる」とではないかと推論した¹²⁾。また、ベンクト・ショーンベックは先行研究をふまえて、「ことにメーラレン湖 (スウェーデン) 周辺地域において発展した、フレイ (大地豊饒神) 崇拝と密接に連合された神話的・宗教的な観念複合が、船葬墓の慣行を成立させたのだらう」と推定している¹³⁾。また最近、クルムリン＝ペデルセン (1991) は、これら既存の説をさらに推進して、船葬墓における船は、「単に死者をヘルやヴァルホルムに葬送することを意図したものではなく、おそらくニョルズとフレイの父子神に対する、神的な帰属性、あるいは神々への祈願をこめた奉納を意味するのだらう」と主張している¹⁴⁾。

もとより私は、考古学については門外漢であり、上記のような近年の成果を知らず、もっぱら古時代の資料の分析を通して、文献資料の解釈と分析かつ民俗学的な見地から古北欧の「流され王」や「海原を渡り来るおさな君」あるいは「水辺に来訪する神」についての研究を進めてきた¹⁵⁾。たとえば、デンマークの始祖王シュルド、あるいはその父シェーフにまつわる、「海原を渡り来るおさな君」の伝承が成立した背景には、豊饒と平和を司るニョル

ズとフレイの信仰が渦巻いていることを詳説した¹⁶⁾。そして、ノルウェーのオセベリ（葬送年代：815-20年頃）やゴクスタ（880-90年頃）、あるいは英国のサットン・フー（625年頃）などに代表される船葬墓について、「なぜ、地面の中から船が？」という素朴な問いを投げかけ、大地と海をつなぐ壮大な世界観が存在していたと結論づけた。端的には、古ノルド語 *jörmun-*「大いなる、力猛き」や古英語 *eormen-grund*「時空的に広大にして永続的な、根源の地」などの用例を検討することによって、その事すなわち古ゲルマンの「中つ国」と「根の国」の世界観が解明できたと思う¹⁷⁾。

バルドルの葬送

母神フリッグが万物からとりつけた呪的誓約のおかげで、不死身となったバルドル。そのバルドルの不死性を確認するかのように、神々は「バルドル攻撃（虐待）ゲーム」に打ち興じていた。その光景を見て不愉快に思ったロキは旅をして、ついにフリッグ自身の口から、死界ヴァルホルの西に生えている宿り木がバルドル必殺の唯一の武器となりうるという秘密を探り当てる。かれは直ちにそれを入手して、神界に持ち来たった。神々はバルドルを中心にして「輪形の集団」(*mann-hringr*)を形成し、例によってバルドル攻撃ゲームに熱中していたが、その輪の外側に盲目のホズが立っていた。「武器を持っていない」ホズにロキは宿り木を手渡し、バルドルの立っている場所を教示した。ホズの射た宿り木は命中し、バルドルは頓死したのだ。こうして「神々と人間たちの中で最大の不幸が発生した」とされる（「ギュルヴィの幻惑」49）¹⁸⁾。

このバルドル殺害神話に関する深層の意味と語りの構造については、拙著『生と死の北欧神話』（以下に略記：『生と死』）やその他の論稿を参照されたい¹⁹⁾。拙著から一部引用しておく。

バルドルの亡骸はアースたちによって海に運ばれ、「あらゆる船のなかで最も大きな」フリングホルニという名の船に載せられている。ただし、そのときに、火葬の薪を積んで、いよいよ進水させようとしたが、その船はすこしも動かなかった。そこでヒュロッキンという名の女巨人を呼び寄せた。彼女は「狼にまたがり、毒蛇の手綱をさばきつつ」訪れたと記されている。彼女の力をもって船首を押せば、「コロに火花を散らしながら、全地が震えて」、船が進水したという。そのとき、ソールが激怒して、槌をひつつかみ、「神々が皆で彼女のために和解をとりつけなければ」、すんでのところ彼女の脳天を打ち割るところだった、と記されている（「ギュルヴィの幻惑」49）。……（中略）……ここでは明記されていないが、巨人（および女巨人）退治において凄まじい「神力」（アース・メギン）を発揮するソールといえども、バルドルの最大級の船を動かすことが出来なかったとみえる。だから、目の前でヒュロッキンの力を見せつけられた雷神すなわち火の神ソールは、憤怒の情をあらわにしたのだろう（『生と死』279-80）。……（中略）……

ところで、ソールの母はヨルズ（「大地」の意）または別名フィオルギュンだが、この後者の名に対応する男性名詞は、古き雷神フィオルギュン（*Fjörgynn*）であり、ゴート語 *fairguni*「山」（および古英語 *fyrgen*）と同系である。古リトアニアの雷神ペルク

ナス (Perkunas) やロシアの年代記 (10-11世紀) に表記されている神ペルヌ (Perunu 「激しく打つもの」の意) との関連が従来より指摘されてきた²⁰⁾。

その他の詳しい議論は省略するが、このようなことから、槌をふるい、巨人退治をするソールには、火雷神の性格が認められ、しばしばその遠征に、火 (logi) の精霊としてのロキを随行するのもうなずけるといふわけだ。…… (中略) ……巨人フルングニルとの決闘の場所にソールがはせ参じたときにも、敵手は「その直後に、稲妻を見て、大いなる雷鳴がとどろくのを聞いた」と記されている (『詩語法』24)²¹⁾。

さて、バルドル葬送の場面に話をもどそう。女巨人のヒュロッキンが「最大の船」フリングホルニをひと押しすると、「コロに火花 (eldr) を散らしながら、全地が震えて」、船が進水したという。この描写は、「稲妻」(eldingar) を発し、天地を震わせる雷神ソールの出現の仕方を思わせる。したがってその時、あやうくヒュロッキンの脳天をかち割ろうとしたというのは、ソールのいつもの行動パターンであったと言える (『生と死』281-82)。

さて、バルドルの遺体が船の中に運びこまれたとき、彼の妻ナンナがこれを見て、悲しみのあまりにショック死を遂げたという。そこでナンナは「火葬の薪の上に運ばれ、荼毘にふされた」。そして雷神ソールが「そばに立ち、ミョルニル槌でその薪を祓い清めた」。また、父神オーズンは、ドラップニルという名の「黄金の腕輪」(gull-hringr) を薪の上に置いた。そして生前にバルドルが愛用した馬は、「すべての馬具とともに火葬薪に運び上げられた」という (『ギョルヴィの幻惑』49)。拙著で述べたように、バルドルは一種の「神々の犠牲者」として殺され、この葬礼は、まるで Jólaveizla 「冬至の犠牲祭」であるかのように、神々のみならず、敵対勢力であるはずの霜巨人や山巨人たちも大勢が参列していた (『生と死』294)。

ヨーラ・ヴェイスラ (冬至の犠牲祭) においては所定の手順で祝杯をあげるという。「まず最初にオーズンに祝杯を捧げ」て、参席した王のために「勝利と権勢を祈願して飲む」とされ、つぎに「豊作と平和を祈願して」ニョルズとフレイの父子神に祝杯をあげ、それから「王のために乾杯する」のが慣わしだとされる。そして列席した人々は、「亡き親族を偲び乾杯した」とされ、それは minni 「追悼礼」と呼ばれた、と記されている (『ハーコン善王のサガ』14)²²⁾。拙著で述べたように、「追悼礼」という言葉から推して、「勝利と権勢」および「豊作と豊饒」などを祈願する、この冬至の犠牲祭は同時に祖霊祭の意義を有していたと解しうる (『生と死』241-42)。

さて、このような「冬至の犠牲祭」の記述に基づき、バルドルの殺害と葬礼の原義に光を当てることが可能となるだろう。バルドルの葬礼には「多くの者たち」が参加したという。

バルドルを船にて葬送するときには、オーズンとフリッグの夫婦神はむろんのこと、ヴァン神族の兄妹神フレイとフレイヤばかりか、「霜巨人と山巨人の多くの連中」も参列していた。またリトという名の小人も加わっていたようだが、かれはソール神によって蹴飛ばされて、バルドルの葬炎のなかで焼け死んでいるから、本来の参加者として認められていなかったのかもしれない。しかし、その名が「輝く者」または「美しき者」を意味して

いることからすれば、バルドルの分身であろうか。いずれにしても、種族の相異を問わず、バルドルをひとしく自分たちのスケープゴートとして海のかなたに送り出しているかに見える（『生と死』292）。

アースたちが「バルドルの遺体を海辺へ運んだ」という記述はすこぶる重要である。すでに詳論したように、葬礼に参加した「多くの者たち」は、同時に「亡き親族への追悼礼」（minni）をこの海辺にて行なっているのだ。むろん、ここに集った「霜巨人と山巨人の多くの連中」も例外ではない。拙著の第七章であげた諸伝承に共通した図式をふまえると、バルドルの「血の犠牲」（blót）は、来るべき年の「豊饒と平和」の予祝となったといえよう（『生と死』294）。

先述したように、父神オーズンは、ドラップニルという名の gull-hringr 「黄金の腕輪」を火葬の薪の上に置いたという。しかし、その腕輪は、冥府に降ったバルドル自身によって、minjar 「数々の思い出」の品としてオーズンに返還されたと記されている²³⁾。バルドルの葬礼は、ラグナロクという「神々の滅びゆく定め」のときが間近に迫った時点で執行されている。したがって、冥府のバルドルからやがて滅びる神界のオーズンへ向けて、魔法の腕輪が返還されたということは、ラグナロクそれ自体が、「大いなる血の犠牲」をともない「豊饒と平和」を祈願する minni 「追悼礼」となることを意味している。というのも、minjar または minnjar 「数々の思い出」（複数形）は minni 「追悼礼」と語原上一致することは疑いもないからである。以上の考察から、海辺での「追悼礼」ないしは祖霊祭の意義を有するバルドル葬礼の季節は、理念的に考えれば、冬至の前後だと推定できよう。

バルドルの妻 Nanna という名称について、従来、シュメールの豊饒女神 Inanna やバビロニアの Ishtar, あるいはプリュギアのアッティスの母 Nana との関連が指摘されてきた²⁴⁾。ちなみに大地母神キュベレーと去勢者アドラストスの両方から愛されるアッティスは、両性具有者であり、あたかも両者の愛に引き裂かれるかのように悲劇的な最期をとげている²⁵⁾。その母 Nana は「ママ」を意味する幼児語であるが、キュベレー自身をアッティスの母とする異伝もある²⁶⁾。加えてキュベレーの異形 Kubebe の-bebe も「ママ」を意味する幼児語であるとされる²⁷⁾。同様なことはバルドルの妻 Nanna についても言えることはすでに指摘した²⁸⁾。

さて、従来見過ごされてきたことがある。バルドルの亡骸を前にして、「悲しみのあまりに（身も心も）張りさけ、死を遂げた」と記されるナンナであるが、その原姿に豊饒母神の本性を認めるならば、ここに動詞 springa 「張りさける」が用いられていることは決してゆるがせに出来ないだろう。「はじける；割れる」を意味するこの動詞は、明らかに穀物の発芽あるいは実りの動態を暗示している。先述したようにバルドルの葬礼が「冬至の犠牲祭」の時節に呼応するならば、悲惨事に直面した Nanna 「母なるもの」の身体が「はじける」という表現は、来るべき春における「発芽」を先取りしているとみるほかはない。

『ベーオウルフ』の詩中から、同系の古英語 springan の用例を拾うと、激しい攻撃あるいは剣の一撃をうけて、怪物グレンデルの傷口が「かっ開いた」（1588）とか、その肩先から腱が「ぶっ切れた」（on-springan : 817）という意味で用いられている²⁹⁾。また、敵の王や怪物に剣の強打を加えたとき、その首筋から血が「迸りだした」（2966 ; ge-springan : 1667）

と記され、あるいは、火葬の炎によって死者の頭部が焼かれたとき、その傷口から鮮血が「迸った」(1121) という意味と文脈で *aet-springan* が用いられている。他の *-springan* の用例で特に興味深いのは、竜退治の勇者シィェムンドにとって、その死後に栄えある名声が「湧き起こった」という意味で用いられ、同じくデンマークの始祖王シュルドの息子 Beow についても、名声があまねく「広まり渡った」意味でもちいられていることである。

いのちの王者 (Liffrea) にして

栄光を司る神は 彼にこの世の栄誉 (woroldar) を授けた、
 ベーオウ (ルフ) は シェデランド (スカンジナビア南部) において
 シュルド王の末裔として誉れ高く ーその名声はあまねく広まり渡ったのだー。

(『ベーオウルフ』 16-19)

この一節についてリチャード・ノースは、Liffrea 「いのちの王者」は旧約の神をさしているが、スカンジナビアの穀物の生育と豊饒という信仰基盤をもって、神のアンチ・テーゼとしての「死の王者」(frea) の存在を前提としており、いわば大地豊饒神 Freyr (別名 Ingvi-freyr) にまつわる信仰を裏打ちする用語であろう、と説いている。同様に worold-ar 「この世の栄誉」についても複合的な意味が掛けられており、「世俗的な繁栄や富」を意味しながらも、ここでは *ár ok friðr* 「豊饒 (繁栄) と平和」を司る父子神ニョルズとフレイへの信仰を示唆しているとされる³⁰⁾。というのも、worold-ar の第 2 要素はニョルズとフレイが司る *ár* 「豊饒」の同系語であるからである。フレイの死後について次のような記事が見える。

スヴィーア (スウェーデン) のすべての人々は、フレイが死去したことを知るにいたったが、それでも豊作と平和が続いていた。そこで彼らは、フレイがスヴィーショーズ (スウェーデン) にある限りは、このような状態が続くのだと信じ、かれを茶毘に付そうとはせず、かれのことを *veraldargoð* 「人の世の神」の名で呼びならわし、それ以降は豊饒と平和を祈願するときにはいつもかれに犠牲を捧げたのだ。

(「ユングリング・サガ」 10)³¹⁾

確かに、用語 worold-ar 「この世の栄誉」は *veraldargoð* 「人の世の神」というフレイの異名と関連付けられるように思える。したがって、「いのちの王者 (Liffrea) が彼にこの世の栄誉 (worold-ar) を授けた」という上記の一節は、「この世の繁栄と豊饒」をもたらすフレイ神にまつわるデーン人の異教信仰を示唆している、とみなした R・ノースの推論は基本的に正しいかもしれない³²⁾。だが、複合語 *veraldargoð* の第一要素は *veröld* の属格形で、字義的には「人が生き、老いてゆく時代」を意味している。古英語 *worold* (または *weorold*)、古サクソン語 *werold*、古高ドイツ語 *weralt* などと同系で、現代語のワールド (英語 *world*; ドイツ語 *Welt*) の概念がそれぞれの古語から由来していることは言うまでもない。近稿で詳しく説いたように、これら古ゲルマン諸語の「ワールド」は、「人間」(古ノルド語 *verr*; 古英語 *wer*) と「時代、生、世代」(古ノルド語 *öld*; 古英語 *ald*) から成る

複合語であった。すなわち、「人がある時代を生き、老いてゆきながらも、次々と人の世代が生まれ代わる領域」が、ワールドの原義であり、いわば「人間界、世界、世間」という居住空間をさすばかりではなく、「時代、存続する生、永遠」といった時間概念をも包摂していたのである（拙論参照³³⁾。

したがって Lif-frea「いのちの王者」が、シュルド王の eafera「世継」なるベーオウ（またはベーオウルフ）に対して worold-ar「この世の榮譽」を授けたという詩行において、相互の用語は緊密に関連している。デネの民が「主君を持たぬまま、長い間苦渋を強いられた」（『ベーオウルフ』14-16）という表現は、一般にはシュルド王が即位する以前には、王位の空白時代が続いたと解されている³⁴⁾。しかし、原語の aldor-leas「主君を持たぬまま」は、字義的に「いのちの無いまま」と解しうる。実際に詩歌のなかでは怪物グレンデルや王者ベーオウルフが「絶命した」という意味で用いられている（1587；3003）。この用語の直後に、Lif-frea「いのちの王者」を主語とする一文が続いているのだから、シュルド王は長らく eafera「世継」に恵まれなかったことを示唆しているのだろう。

さて、デンマークの王統譜におけるシェーフ（Scef）—シュルド（Scyld）—ベーオウ（Beow）という初期三代の名に焦点を当てれば、祖父 Scef は「穀物束」（現代語 sheaf）、父 Scyld は「楯」、そして息子の Beow は「大麦」をそれぞれ意味している。ふたたびノースの説を紹介すれば、Beow について、「その名声はあまねく広まり渡った」（blæd wide sprang）と記されているが、blæd を短母音で発音すれば「葉身」（現代英語 blade）の意味になる。したがって、この一文は、ベーオウの名声の拡充のみならず、大麦（Beow）が生長して「葉身がふくらみはじける」くらいになったことの掛詞であると解されている³⁵⁾。実に興味深い説である。

ちなみにスウェーデンのユングリングという王朝名は、大地豊饒神フレイの異名 Yngvi より発している。「ユングリング・サガ」9-11章の記述によれば、ニョルズーフレイ—フィヨルニルの初期三代の治世中は、それぞれ「豊饒と平和」に満ちた時代であったとされるが、先述したデンマークのシュルディング王家と同じように、第二代の統治者の名を採って名祖としている。いずれにせよ、王の「名声」の拡大と「豊饒と平和」が大地に満ちあふれることを、まさに連関的に捉える古代思想があったかに見える。王は軍事的に「平和」を招き寄せるばかりではなく、フレイザ一流には穀物祭司王として「豊饒」を招来する力能を有するとみなされたのだろう³⁶⁾。

ベーオウルフの葬送

周知のように、詩中、ベーオウルフという同名の人物が二人登場している。主人公であるイエーアト王家のベーオウルフが、三種の怪物退治で名声を馳せたのに対して、デンマークのシュルド王家のベーオウルフについては何ら具体的な偉功が述べられずに、ただ単に worold-ar「この世の榮譽」を授かった、と記されているだけである。『ベーオウルフ』という詩歌は、デネのシュルド王の葬送に始まり、イエーアトのベーオウルフ王の葬送に終わっている。だが、前者のシュルドは「世継」としてベーオウルフを得る幸運に恵まれたのに対して、後者のベーオウルフは、いまわの際の言葉として、「この身体より出でたる、わが息

子」すなわち己の血をひいた世継が一人も生まれなかったことを嘆き悲しんでおり (2729-32), まさに好対照をなしている。

したがって、デンマークのベーオウルフ (または Beow) が浴した worold-ar 「この世の榮譽」は、シェデランド (北欧南部) に「その名声はあまねく広まり渡ったのだ」と記されているように、当人の死後も子々孫々、「この世」(ワールド) のある限り時空的に存続する「榮譽」を含意している。ところが、世継のない、イエーアトのベーオウルフの場合には、最期は茶毘に付され、岬の小高い所に築かれたその hlæw 「墳丘」は、「戦いに勇猛な者の記念碑 (beacen)」として「海ゆく舟人らにとって、遠く望める」だけのものとなっている。ここでは一般の解釈に従い、beacen を「記念碑」と訳したが、舟人にとって遠くから望見できる「行路標識」となるという、やや皮肉めいた解釈も成り立つであろう。

そこで嵐のイエーアトの民は 岬に墳丘を
築き上げた。 それは海ゆく舟人らに
遠く望めるほどに、 高くて広大なものだった、
それから十日をかけて 戦いに勇猛な者の
記念碑を建立し、 葬炎の遺灰のまわりには、
工芸に巧みな者らが、 その技量を尽くして
きわめて見事なる 壁を張りめぐらした。 (『ベーオウルフ』 3156-62)

このように、遺灰のまわりには、「きわめて見事なる壁を張りめぐらした」という。工人の技の粋をこらしたものであるから、相当に堅固な weal 「壁」であったとみえる。したがって直截に読めば、「遺灰」への余人の接近を拒む防壁であったようであり、岬の突端に位置したとおぼしき墳丘は、まさしく海上に行く人たちにのみ、「遠く望める」ものにすぎない。そして人々は、数々の宝物をベーオウルフの beorg 「塚」の中に埋め、そのまま「大地が所有するにまかせた」とされる³⁷⁾。

彼らは塚のなかに 宝環や宝石類その他、
憎悪に燃えた者どもが 奪い去って
かつて宝庫にたくわえてあった、 あらん限りの装身具の類いを埋めた。
砂土のなかに黄金を埋め 戦士たちの財宝を
大地が所有するにまかせたのだ。 そこには以前にそうであったように、
人々には無用なるがままに 今もなお埋蔵されてある。 (3163-68)

これらの財宝は、元来、ベーオウルフが討ち果たした竜の beorg 「塚穴」に秘蔵されていたものであった。ベーオウルフの遺灰を埋めた「塚」と、竜の住み処なる「塚穴」が対応するのは明らかだ。しかも、竜の塚穴には weal 「壁」がほどこされてあり、イエーアトの「土地の民」に対して bæl 「滅びの火」または brond 「火焰」を浴びせた竜は、敵の反撃にそなえて、「塚穴 (beorg) や壁 (weal) を防戦の頼みとしていた」と記されている (2321-23)。ベーオウルフを brond 「葬炎」で焼いた後の遺灰は、当然、かつて竜が保有していた

宝物と同様に、「塚」のなかに埋められたはずである。そしてその遺灰のまわりを「壁」で囲んだというのだから、ベーオウルフの墓塚についての表現は、竜が吐く「火」によるイエーアトの民への攻撃、ならびに竜としての「塚穴」と「壁」を頼みとする防戦の描写と、共通する表現要素 (brond; beorg; weal) を含んでいることになる。いわば, bael と brond の用語に表徴されるように, イェーアトの「土地の民」に放射される竜の「火焰」と, ベーオウルフの遺体を焼き尽くす「葬炎」は, 相互連関をもって把握できることになる。

ベーオウルフは, 竜に火焰を浴びせられて危機に見舞われたが, Wiglaf (「戦闘の生き残り」の意) という名の同族の若武者の加勢を得られたお蔭で, 最終的に竜を討ち果たすことができた³⁸⁾。ウィーイラーフはその名前の通りに, 「竜との激闘を生きのびた者」であるが, 対照的に, 老王ベーオウルフは絶命し, bronda laf 「葬炎で焼かれたあとに残る遺灰」となってしまった, という諧謔的な解釈が成り立つ。

あわせて, 竜の宝が, 「以前にそうであったように, 人々には無用なるがままに (unnyt) 今もなお埋蔵されてある」というのだが, この状況はベーオウルフの遺志に反している。というのも, ベーオウルフは竜に首筋を咬まれ, その毒が体内にまわって臨終を迎えることになるのだが, そのときに次のようなことを語っているからである。ウィーイラーフの助勢をもって火竜を討ち果たし, 絶命寸前のとき, 竜の宝を目にしたがらの言葉である。

「……私は最期の日を迎える前に わが民のために
かかる財宝を 勝ち取ることが許された。
いまや私は山なす財宝のために わが老いたるいのちを
代償としたのだが, それでも民の利益となるよう
意を砕いてほしい, 私にはもはやこの世に生き長らえることが出来ないから。
葬炎で焼いたあとに 戦闘に誉れ高き者どもに命じて
海辺の岬に 壮大な墳丘を築くようにさせよ。
それはわが民にとって 鯨の岬に
高くそびゆる 思い出の碑となるだろう,
さすれば, それを, 潮の狭霧のなかを
遠くから舟を操る 海ゆく舟人らは,
ベーオウルフの塚と 呼んでくれよう。」 (2797—2808)

この臨終の言葉にみえるように, 「老いたるいのちを代償とし」て竜を討ったベーオウルフは, 「山なす財宝」をイエーアトの「民の利益となるよう」にと望んだのだが, その遺志は実現されなかった。しかも, 竜が300年の長きにわたって「海辺」の「塚穴」の中に隠し持っていた宝物は, 「壁の下の驚異」(wundur under wealle) などと呼ばれている (3103)。この一見, 奇妙な言い回しは, 匠の技をこらした「きわめて見事なる壁」が張りめぐらされたベーオウルフの「塚」と対応している。老王ベーオウルフがその命を賭けて奪い取った竜の財宝は, その「塚」の中に, 「以前と同じように」今もなお unnyt 「無用なるがままに」埋められてあるというのだから, 遺言どおりに「海辺の岬」(2803) に葬られたベーオウルフは, 皮肉にもその死後, 「海辺の塚穴」にて宝を独占する竜の特性を帯びるにいたったと

言えよう。過去の卑見を繰り返すと、ベーオウルフと宿敵の竜はいずれも *gæst* 「(恐るべき) 異人」と呼ばれている。「50歩の体長を有する」竜は (3042), 50年の長きにわたって一国を統治したベーオウルフの内なる「異人性」を反映している、と説いた (水野1989)³⁹⁾。すでに詳論を加えたように、ソール神の宿敵ミズガルズ蛇と同じく、火竜はベーオウルフにとって討つべき「もうひとりの自己」であった (拙稿2001)⁴⁰⁾。

葬炎で遺体を焼いたあとに、Hronesnæs「鯨の岬」と呼ばれる海辺に、民にとっての「思い出の碑」となるように「壮大な墳丘」を築くことを命じたのは、いまわの際にあるベーオウルフ自身であった (2802—08)。ここで「思い出の碑」と訳出した *gemynd* は、先述した古ノルド語 *minni* 「追悼礼」や副葬品としての *minjar* 「数々の思い出」などに関連がある。それらの基底にあるのは、死者への哀悼の意をこめた「追憶、記憶」という意味概念である。ベーオウルフの場合、ほぼその遺言に従い、亡骸は「鯨の岬」へと運ばれ、荼毘にふされた後に、岬に「高くて広大な」(3157) 墳丘が築かれている。しかし、老王の遺体がその岬に運ばれるとき、同時に「数え切れないほどの輪形の黄金が荷車に載せられていった」という (3134—35)。あたかもこの時点で、来世にいたるまで、ベーオウルフは莫大な黄金の占有者になりはてたかのようなのである。そしてその直前には、「財宝の守護者」なる竜の亡骸を「岩壁の崖 (*weall-clif*) から押し出だし、海が受け取るにまかせ、潮の流れにゆだねた」、という重大な一文が置かれている。ある意味ではきわめて皮肉なことに、ベーオウルフの *laf* 「遺灰」は、工芸の技をつくした堅固なる *weall* 「壁」で囲まれていたのに対して、竜は、*weall* 「岩壁」の崖を「乗り越えて」(*ofer*)、外へと押し出され、あたかも船が海に進水するかのごとく、潮流に「その身をゆだねた」のだ。それは、直訳風には「潮の流れの抱擁する (*fæðmian*) にまかせた」と解しうることも分かる。

ベーオウルフと竜のいずれも、海辺での葬送という伝来の方式に則っていると解しうるが、この視点に立てば、ベーオウルフよりも、宿敵なる竜の方が、シュルド王の船葬に近接したやり方で葬送されていると言える。

ユングリング王家の始祖フレイの葬送

さて、上に引用した「ユングリング・サガ」10章に記されているように、スウェーデンの人々は豊饒と平和を恵与してくれたフレイへの思いを断ちがたく、火葬にふすことを厭ったとされる。この記述は、妻と愛馬もろとも荼毘にふされたバルドルの葬送描写とは大きな隔たりがあるかに見える。バルドルの亡骸は「すべての船のなかで最大のもの」と歌われたフリングホルニによって葬送されたのに対して (「ギェルヴィの幻惑」49), フレイは、「船のなかでも最高のもの」とされるスキーズブラズニルを有していたにもかかわらず (「グリームニルの語り」44), その特性上、火葬のみならず、船葬とも無縁であったようである。

アースの神界を初期三代の王統譜に擬定すると、バルドルは父オージンと息子フォルセティの中間の第二世代に属する。本来ならば、バルドルがオージンの後継者として玉座フリズスキャールヴに座するという神話があっても然るべきなのだが、「すべての国々を見渡せる」その玉座に、偶然になぜか座ることが出来たのはフレイであったとされる⁴¹⁾。フレイはそのときに、「女性のなかで最も美しい」ゲルズを見初めたという (「ギェルヴィの幻惑」37)。

拙稿で指摘したように、ホズの射た宿り木によって落命したバルドルが冥府に降り、死女神ヘル館の öndugi「高座」に座していたという話は（「ギルヴィの幻惑」49）、したがって一種の諧謔と読める⁴²⁾。

いずれにせよ、バルドルの遺体はアースたちによって、「海辺」に運ばれ、まずは自分自身の船の中に安置されている。同じように逝去したシュルド王についても、「かれら寵臣たちはそこで、王みずからが生前に命じたままに、海の流れの方へ遺体を運びだした」と記されている。両者の相関関係を重視すれば、シュルド王が家臣たちに「生前に命じた」ことは、バルドルと同様に、生前に愛用した船によって海へ送り出されることだったのかもしれない。

それに対してフレイの場合には、重い病を患い、その死期が近いとき、人々は「誰もかれに会いにこないように」と画策し、「一つの入り口と三つの窓のある大きな墳丘を築いた」という。

こうしてフレイが亡くなったとき、彼らは遺体をひそかに例の墳丘へ運び入れ、スヴィーア（スウェーデン）の人々には、フレイがまだ生きていると告げ、そこに3年の間とどめ置いた。しかし彼らは、ひとつの窓から黄金、別の窓からは銀、そして三つめの窓からは銅貨というふうに、すべての貢ぎ物をその墳丘の中に納めた。こうして豊饒と平和の時代が続いたのである。（「ユングリング・サガ」10）

不思議な伝承だが、フレイの死は、ごく限られた者をのぞき、一般の民には秘密とされ、少なくともその秘密を保持できた3年間は、「豊饒と平和」を招き寄せた統治者の呪的な力が死後も存続したことを語っている。すでに引用したように、その後、「スヴィーアのすべての人々は、フレイが死去したことを知るにいたったが、それでも豊作と平和が続いていた」という。そこで茶毘にふすことはやめて、フレイを veraldargoð「人の世の神」の名で呼んで崇拝したとされる。一般的に考えて、遺体を3年も墳丘に安置して、その後に火葬にするというのはいかにも不自然である。オージンが、その死後にほどなくして茶毘にふされたという（「ユングリング・サガ」9）。まさに好対照をなす伝承として位置づけられる。

周知のように日本では、貴なる人の逝去に際して、本葬を行なう前段階として、一定期間、遺体を仮の宮に安置して祭り上げてきた。そのような宮を濱（もがり）の宮またはアラキ（新城の意か）と呼び、故人の魂がまだこの世にとどまっていると考えられた⁴³⁾。上の伝承において、「一つの入り口と三つの窓（gluggr）」を持った haugr「墳丘」というのは、北欧版の一種の「濱（もがり）の宮」ではあるまいか。3年はやや誇張された数字であろうが、亡き王者フレイのための服喪期間とみなせば、さほど不自然ではなくなる。少なくとも一定期間中は、息子フィヨルニルが次代の王位に就くことはないことを暗示している。

『ベオールフ』の冒頭部のあの表現、すなわちデネの民が「主君を持たぬまま、長い間苦渋を強いられた」（14-16）という一文がふたたび問題視されてこよう。シュルドの父シェーフは、先述したように「穀物束」の意味である。その名義からしても、この世に「豊饒」をもたらした統治者であったと想定できる。フレイと同じように、先君シェーフの偉功を偲び、その逝去の後も後継者を立てることがなく王位の空白期間があったのだろう。まさに alдорleas「主君を持たぬまま」という用語が、そのことを示唆している。

漕ぎ手なき舟にて漂うて—ハキ王の葬送—

「ユングリング・サガ」には、神話上の父祖ニョルズならびにユングヴィ・フレイの末裔とされた王族や勇者たちの話が載っている。英雄的な事績を語るものもあれば、突発的な不幸や悲劇的な出来事、また暴力的な、あるいは無惨な死に方を描いたものもある。ときには兄弟が支配権をめぐる争う話が記される。たとえばアルレクとエイリークの兄弟は、いずれも偉大な戦士であったが、馬を操る腕前を誇って競い合い、ついには死闘にまで発展している（20章）。また、アルレクの息子であるユングヴィとアールヴは、王国を引き継いだ、性格がまったく異なる兄弟で、「最も美しき女性」ベラ（アールヴの妻）をめぐる激しく争い、互いに相手に致命傷を負わせて落命したという。そして両者はともにフューリの野に埋葬されている（21章）。

次代の王位を継承したのは、アールヴの息子フグレイクであった。というのも、ヨルンドとエイリークという名のユングヴィの息子たちは、まだ年端もゆかぬ子供であったからだとされる。彼らユングリング王家の一族のほか、ハキとハグバルズ兄弟が登場している。歴戦の勇士として名を馳せ、軍船の統率者であったので、ともに *sækonungar* 「海の王者（たち）」という異名で呼びなされている。さて、ハキ王は、フューリの野での激戦の末に、フグレイク王とその息子たちを討ち果たし、みずからスヴィーア（スウェーデン）の王として君臨し、国を統治すること3年に及んだという。

それから数年を経て、たくましく成長して功成り名を遂げたヨルンドとエイリーク兄弟が、ユングリング王家の伝来の土地を奪回するために、遠征から帰還してくる。注目すべきことに、これに続く激戦の地は、またしてもフューリの野（ウップサラ近郊のフューリ川の岸边）であり、彼ら兄弟にとっては父ユングヴィと叔父アールヴがともに埋葬された場所であった。

この戦闘において、ハキ王は勇猛に戦い、エイリークを返り討ちにし、ヨルンドとその戦士たちのすべてを船の方へと敗走せしめた。しかし、みずからも致命的な深手を負ってしまった。そして次のように記されてある。

ハキ王は重傷を負い、もはや余命幾ばくもないことを悟った。そこで彼は、自分が所有していた軍船のうちの一隻に、死者たちと数々の武器類を運び入れさせた。こうして彼は船を進水させると、櫂を据え付けさせて、帆を引き上げさせ、それから樹脂を含むモミ材に火をつけさせ、また船には薪を積み上げさせた。風が陸のほうから吹いてきた。ハキがその薪の上に横たえられた頃には、彼は死んでいたか、もしくは死を迎えつつあった。その直後、船は燃えながら海を進んでいった。それから長い間、この出来事はきわめてよく人の噂にのぼった。
(「ユングリング・サガ」23)

この記伝にみるように、死期の近いことを悟ったハキ王は、おそらく先のフューリの戦場にて死した武人たちと武器類を、「自分が所有していた」船の中に運び入れるように、と家臣に命じている。まさに *sækonungr* 「海の王者」と称されたその異名にふさわしく、ハキ

王はおのが「魂」を sæ「海」の流れに委ねることを欲したようである。しばしば征旅にでかけた王は、死路の旅に際しても、あえて最も愛用した skeið「軍船」の一隻を選び出したかにみえる。デネ族の寵臣たちが、生前にシュルド王に命じられたままに「海の流れの方へ王の遺体を運びだした」という状況ときわめてよく似ている。先述したように、バルドルも「自分の船」フリングホルニの中にその遺体が運び込まれている。「バルドルの遺体は船の中に運び込まれた」という表現と「バルドルの馬は、すべての馬具もろともに火葬の薪の上に移し置かれた」という表現は、明らかに対応している。拙著でも述べたように、古ノルド語 segl-vigg「帆の馬」や vág-marr「波の馬」および古英語 brim-hengest「海の馬」は、「船」を意味する伝統的なケニング（婉曲代称語法）であった（『生と死』301）。父神オーゾンが「火葬の薪の上に、ドラップニルという黄金の腕輪を置いた」という一文も相補的な意味を有する（「ギュルヴィの幻惑」49）⁴⁴⁾。この箇所では、バルドルの愛馬を「移し置く」ことを表わす動詞 leiða と、副葬品として黄金の腕輪を「置く」ことを意味する動詞 leggja が共起している。同じく、「愛しき」シュルド王の遺体を、船内の「帆柱の近くに横たえた」という語りとは、その船に「あまたの財宝が積み込まれた」という一文も（『ベオーウルフ』34-37）、葬送の情景を描く上で相補的な関係を有するだろう。というのも、財宝を lædan「積み込む」という動詞と、王の遺体を a-lecgan「横たえる」（安置する）という動詞が共起しており、これらの古英語動詞は、先の古ノルド語動詞とそれぞれ同系であるからだ。

ハキ王の葬送に際して船に櫂が据え付けられたというのだが、むろん漕ぎ手がいるはずもない。櫂を据えたのは、葬送の船が特定の方向に流されて行くことを祈念してのことだろうか。シュルド王の葬送描写でも、「王館の賢者であろうと、また天下の武人であろうとも、何者かその荷（王の遺体または魂）を受け取ったか、真実をもって語りうる者は誰もいない」と最後に付言されている（『ベオーウルフ』50-52）。ここでいう「その荷」は、王の「遺体」もしくはその「魂」をさしていると考えられる。おそらく本来は、海のかなたにて、「何者かその荷を受け取るのか」という重大事を、多分に「伝承上の真実」をもって語りうる者がいたはずである。そうでなければ、「海の王者」ハキを葬送する船にあえて「櫂を据え付け」るはずもあるまい。

たとえば、ベオーウルフとの格闘のすえに致命傷を負った怪物グレンデルが、湖沼に身を沈める様はつぎのように描写されている。

そこには水が 血に染まって渦巻き、
 恐るべき波の逆巻きが 熱き鮮血と
 すっかり混ざり合い、 戦闘の血しぶきで湧き立っていた。
 死の定めを受けた者は姿を隠した、 そ奴は喜びもないままに
 沼の隠れ家のなかに いのちを落とし、
 異教の魂を委ねたのだから。 そこではヘルがそれを受け取った。 (847-52)

すでに拙論を設けたように、最終行の女性名詞 hel は両義的であり、「冥府」を表わすと同時に、冥府を支配する女神 Hel の存在を示唆している⁴⁵⁾。死女神ヘルの名は、語原的に「死者を隠すもの」を意味していた⁴⁶⁾。したがって、「死の定めを受けた者」なる怪物グレ

ンデルが deagan 「姿を隠す」という表現と、異教の sawol 「魂」を沼の freoðo 「隠れ家」または「避難所」のなかに「委ねる」という言い回しは、ヘルを概念を基軸として緊密な連想を惹き起こしている。付言すれば、異教の魂を「委ねる」という動詞 a-lecgan は、シュールド王の遺体を船内に「横たえる」（安置する）ことを表示する動詞と同一である。

後述するように、古ゲルマン的な基本理念によれば、sawol 「魂」は sæ 「海または湖沼」より発して、そこに帰属するものであった。それゆえ、怪物の死を語るこの箇所には、「水」や「波」そして「沼」などの語句が散りばめられているのも理會できる。「ヘルが受け取ったもの」、すなわち「それ」(him) というのは、グレンデルの「異教の魂」をさしているにちがいない。従来、Grendel の語原については定まった解釈がなかったが、最近、古ゲルマン的な世界観を照射し、「根の国 (grund) に帰属するもの (語尾-el)」と説く卑見を提示しておいた⁴⁷⁾。

思えば、船によって葬送されたバルドルを「受け取った」のも、死女神ヘルであった(『生と死』226—33)。ハキ王の船は、「陸のほうから吹いてきた」風によって、バルドルの船と同じように、燃えながら沖へと漂い流され、ついには火炎に包まれて海の藻屑と化したにちがいない。その行き着く先はヘル、とみなされていたのだろうか。ともかく、この葬送場面が続いて、ユングヴィの息子ヨルンドが、ウップサラにて王となったことが記録されている(24章)。ユングヴィ・フレイの末裔は、こうして最終的にスウェーデンの王位を奪回したのだ。

「流され王」としてのシュールド

すでに「古北欧の流され王」その他の拙論をもうけたように、Beow の祖父シェーフと父シュールドについて、漕ぎ手なき舟にて海を漂流した話が伝わっている⁴⁸⁾。論を繋ぐために簡略に紹介しておこう。まず、デンマーク王家の始祖とされるシュールドについては、古英詩『ベーオウルフ』の冒頭部に記載されている。

シェーフの子シュールドは しばしば敵の軍勢から
また多くの民から 酒宴の座を奪い、
戦士たちを怖れさせるにいたった。 最初のうちは
哀れな姿で見出されたが、 そこから救い出され、
天が下に栄えて 然るべき誉れを勝ち取った。
ついには四隣の民は ことごとく彼に服し
服従するにいたり、 鯨の路(海原)を渡りゆき
貢ぎ物を捧げねばならなかった。 まことに英明なる王であった。
……(中略)……
こうしてシュールドは 定めの時が来たりて、
大いに剛健であったものの 主のみもとへ旅立っていった。
かれら寵臣たちはそこで 王みずからが生前に命じたままに
海の流れの方へ 王の遺体を運びだした。

…… (中略) ……

貴人の乗り物 輪形の舳先なす舟が
 かの港に停泊していた、凍てつきながらも、今にも出立せんとして。
 そこで彼らは 宝環の分与者なる
 愛すべき王を 舟のふところ
 帆柱の近くに横たえた。そこにははるか遠方より
 運ばれ来たる宝物と、装飾品の数々が積み込まれていた。
 私はおよそ聞いたためしがない、戦いの武具
 そして戦闘用の具足、刀剣や甲冑のたぐいによって
 かくも壮麗に 舟が飾り立てられたことを。
 それらはかの亡骸とともに 潮の力にゆだねられて
 遠きかなたへ 去ってゆく定めなのだ。
 彼らは貢ぎ物として 民の伝来の宝物を
 かの君に献上したのだが、その分量たるや、
 往時の始まりのときに、まだ主君の幼い頃に
 海原をただひとりで越えるべく 送り出したときに、
 積みなされた宝に比べて、けっしてひけをとらぬものだった。

(『ベオーウルフ』 4-46)

デネ (デンマーク) の始祖王シュルド・シェーヴィングが舟によって海の彼方へ葬送される描写である。シェーヴィングという名は、「シェーフの息子」の意味だが、シェーフ (Sceaf) は先述したように一般に「穀物束」(英語 sheaf) と解されている⁴⁹⁾。

まず、シュルドを葬送する船が æbelinges fær 「貴人の乗り物」(33) と呼ばれていることに着目されよう。「貴人」がシュルドをさしていることは言うまでもない。「海の王者」と称されたハキ王が「自分が所有していた」軍船で葬送されることを望んだのと同じように、シュルド王も、軍旅につくときに愛用した船によって死路の旅立ちをしたいという遺志を、「寵臣たち」に生前より伝えてあったようである。hringed-stefna 「輪形の舳先なす舟」という用語は、バルドルを葬送した船 Hringhorni を想起させる (『生と死』 299)。また、ラグナロクの時、神々を滅ぼす魔の軍勢が Naglfar という船に乗って襲来するとされ、その船は「死者の爪 (nagl) から造られている」という (『ギルヴィの幻惑』 51)。Naglfar の第二要素は上記の古英語 fær 「船」と同系で、動詞 faran 「旅する、さすらう」から派生した fær には、当然のことながら、「旅、遠征、移動」などの意味がある。「死者を葬送する舟」という語義を想定できるように思う⁵⁰⁾。

「はるか遠方より運ばれ来たる宝物と装飾品の数々」(36-37) が王の遺体の近くに運び込まれている。生前にことごとく「四隣の民」を従えたシュルドのもとに、数々の gombe 「貢ぎ物」が捧げられたのだが、皮肉めいたことに、その一部は、王を葬送する船の中に積み込まれたかにみえる。そして、ハキ王の船と同じように、多くの武器の類いが積みなされている。

シュルド王の葬送に際して舟に積まれた宝物は、「往時の始まりのときに、まだ主君の幼

い頃に、海原にただひとりで 送り出したときに積みなされた宝に比べて、けっしてひけをとらぬものだった」と記されている。ここに用いられた *frum-sceaft* 「始まりのとき」という表現は、デーンの民が「主君を持たぬまま、長い間苦渋を強いられた」(14-16) ことと関連があるだろう。言いかえると、シュルドは幼少時に宝を満載した船に乗せられて、この土地に漂着し、成長したのちにシュルド族の名祖として王に即位したことを物語っている。「最初のうちは哀れな姿で見出された」(6-7) という記述は、あるデーン人が彼を養育したことを示唆している。すなわち異郷より海の波に揺られつつ漂着した幼児を神の子であるかのごとくに崇め、「はぐくみ申す者」(折口信夫の用語) がいたと解しうる(拙論参照)⁵¹⁾。

さてシュルド挿話の検討に立ちかえると、「最初のうちは哀れな姿で見出され」(6-7) と記されているように、よるべなき子を養い、シュルド族の「名祖」と歌われるまでに成長するのを見届けていた者たちがその傍らにいたはずである⁵²⁾。R・ノースの解釈によれば、*frumsceaft* 「最初」という用語は、麦が生育する前の初期の段階すなわち「初めの莖」(*first-shaft*) を示唆しているとされる。そして *feasceaft funden* 「哀れな姿で見出され」の語句も両義的な解釈が可能で、*feasceaft* は「友人がいない」という表面的な意味のほかにも、「麦束から脱穀した種子」の「莖がまだ出ていない」状態を暗示していると説いている⁵³⁾。ノースによれば、詩人は *Sceaf* 「麦束」の息子シュルドについて、支配者としての軍事的な側面と農耕的な特性を重複して描いており、「四隣の民がみな鯨の路(海原)を渡って貢ぎ物を捧げねばならなかった」という表現に並置された、「天が下に栄え、然るべき誉れを勝ち取った」という言い回し(8-11)は、「雲(*wolcen*)の下」で生長し繁茂する麦が実りの時期を迎えたことの暗喩となっているとされる⁵⁴⁾。実に卓抜な解釈である。

このようにシュルド王が権勢を誇った全盛期と穀物の実りの時期が呼応するのであれば、逝去したときの王に付された *fela-hror* 「大いに剛健な」という形容詞は、いささか奇妙な感じがする。さすがに「剛健な」シュルド王も、寄る年波には勝てなかったということだろうか。しかし、「若き」勇者ベーオウルフが水底にて女怪を退治して、地上で待つ従者たちのもとへ無事に生還したときに、「その剛毅(*hror*)なる者」(1629) と呼びなされている。この用例に基づけば、シュルド王がこの世を去ったのはさほど老齢であるはずはない。穀霊の化身ともいべきシュルドの逝去の時節は、理念的には、実った麦が刈り入れられ、その種子が貯蔵箱に大切に保存される一季と重なり合うだろう。「大いに剛健な」という形容詞は、麦の種子にひそむ「若き生命力」を暗示しているように思える。王の遺体は「舟のふところ」、そして「帆柱の近く」に横たえられたとある。「凍てつきながらも、今にも出立せんとして」(*isig ond utfus*) という語句に基づけば、この葬送の時節は、冬の一季であるにちがいない。

「大いに剛健」を誇ったシュルドにも、ついに「定めの時が来たりて、主のみもとへ旅立っていった」、とある。この用語 *gesceap-whil* 「定めの時」の第一要素は、動詞 *scyppan* 「創造する、形作る」より派生し、後者は古ノルド語 *skapa* 「造る、運命を割り当てる」と同系である。たとえば、三人の運命女神が、人間の *aldr* 「寿命、人生、運命」を「割りふる、決定する」という意味で *skapa* が用いられている(『ギェルヴィの幻惑』15)。また、殺された巨人ユミルの肉体から、大地が「創造される」というときにも(『ヴァフスルーズニルの語り』35)、同一の動詞が使用されている(『生と死』106)。要するに、*gesceap-*

whil「定めの時」という用語は、ゲルマン古来の「運命」観（古英語 *wyrd*；古ノルド語 *urðr*）を反映しているが、その一方では、王の逝去を語るに際して、「主のみもとへ旅立って」ゆくというキリスト教的な表現が並置されている（『生と死』68）。

しかし、この脈絡における *Frea*「主」は、明らかに大地豊饒神 *フレイ* を同時に含意していると考えたい。なぜならば、先行する詩行において、*Lif-frea*「いのちの王者」が、シュルド王の「後継」なる *ベーオウ* に対して *worold-ar*「この世の榮譽」を授けたと記され、上に紹介した *R・ノース* の説に従えば、その用語にもデン人への *フレイ* 崇拝が示唆されているからである。すなわち「この世の榮譽」に加えて、*Lif*「いのち」を授ける神が *フレイ* であるのならば、「定めの時」に、その「いのち」を受け取るのも同じ *フレイ* であるという古代信仰を想定するのはさほど困難ではあるまい。

『ベーオウルフ』の詩中、デン人は *Ing-wine*「(穀霊) イングの友」と呼ばれているが、*Ing* が *フレイ* の別称 *Yngvi* に通ずることは言うまでもない。シュルドの末裔に当たる *フ羅斯ガール* 王が *frea Ing-wina*「イングの友(デン人たち)の主君」(1319) と称されていることは特に注目し得る⁵⁵⁾。通説によれば、神名 *Freyr* と *frea*「主君」は語原的に一致している。いわば、*worold-ar*「この世の榮譽」に授かるという表現は、統治者が *フレイ* 神の加護を得て、「この世」すなわち「人が生き、老いてゆく時代」に豊饒と平和をまねき寄せたことを含意している。すでに拙論を展開したように、たとえばシュルドのごとき「英明なる王」の亡骸を、「潮の力にゆだね」て海のかなたの楽土へ向けて送り出すという葬法の背景には、文字通り「豊饒と平和」(*ár ok friðr*) を司る父子神 *ニョルズ* と *フレイ* にまつわる信仰が渦巻いている⁵⁶⁾。

幼童シュルドと穀霊イングー海より来て、海のかなたへ去ってゆくもの一

当然のことながら、シュルド王の死は、「シュルド王の末裔として誉れ高」き者と詩歌にも詠まれているように、*Beow*「大麦」という名の「息子」(*eafera*) がその後継者になることを意味している。シュルド葬送の舟が、「凍てつきながらも、今にも出立せんとして」港に停泊していたと記されている。その季節は初冬、真冬、それとも晩冬のいずれを思い描くべきだろうか。

先述したように、デン人は *Ing-wine*「イングの友」と呼ばれていた。穀霊イングについての古英語のルーン詩(9世紀)をふたたび紹介しておこう⁵⁷⁾。

イングは最初に 東デンの
人々のあいだで見受けられたが、 その後ふたたび
波路を越えて去ってゆき 車がそれを追いかけた、
そこでヘアルディング族は かの者の名を呼ばわった⁵⁸⁾。

拙稿で示した主張を繰り返すと、*Ing-wine*「イングの友」は「デン人の王」を表し、民を統治する主君は「*フレイ*の神威を身にまとった者」でなければならぬという宗教上の理念が存在していた。

このルーン詩は、「最初」は「東デーンの人々」の間で尊崇されたイングが海の彼方へ去ってゆき、「豊饒」をもたらしてくれた穀霊イングを何らかの原因で喪失したことを物語っているのだろう。しかしその喪失も一時的であったかのように思われる。「その後ふたたび」という表現は、イングの来訪と帰去が定期的にかつまた儀礼的に繰り返されたことを意味している。ヘアルディング族が去り行くイングの名を「呼ばわった」ということは、したがって本来であれば然るべき時に「また訪れ来る」という期待感がこめられていたように思える（水野1998）⁵⁹⁾。

問題のルーン詩と『ベーオウルフ』のシュルド葬送場面で同一の副詞 *ærest* が用いられている。穀霊イングが *ærest* 「最初に」東デーン人の中で「見受けられた」という表現は、シュルドが *ærest* 「最初のうち」は「哀れな姿で見出された」という記述と対応しているとみなすべきだろう。すでに紹介したように、R・ノースは、「哀れな（孤独な）姿で」を意味する用語 *feasceaft* が「麦束から脱穀した種子」の状態を暗示していると説いていた。そうすると、「波路をこえて去ってゆく」穀霊イングと、幼少のとき、すなわち *frumsceaft* 「往時の始まりのとき」に、「海原をただひとりで越える」べく「送りだされた」というシュルドの姿が重なって見えてくる。穀物の種子あるいは麦束を、櫂のなき小舟にて海上に流す儀礼的な慣行がかつての北欧に存したのではあるまいか。すでに卑見を提示したように、「民の守護者」としての王は「豊饒と平和」を司る呪力を備えたものと考えられていた⁶⁰⁾。いわば「穀物祭司王」というJ・G・フレイザー流の基本概念は、古北欧の王の理念型を映し出すように思う⁶¹⁾。

10世紀末頃のエーゼルウェルドと12世紀のウィリアム・オヴ・マームズベリの二つの年代記に、いわゆる北欧版「流され王」伝説が記されていることについては、過去の論稿で紹介済みだが（水野1998）⁶²⁾、ここでは後者の資料のみ再度提示することにしたい。

シェルディウス (*Sceldius*) はシェアフ (*Sceaf*) の息子だった。伝えられるところによると、彼 (*Sceaf*) は、漕ぎ手の無き舟によって子供の時にスカンツァ (*Scandza*) と呼ばれるゲルマーニアのさる島——これについてはゴートの史家ヨルダネスが語っている——に漂着した。眠れるがまま、頭に穀物束が置かれていたとされ、この事から *Sceaf* (麦束) の称号が与えられた。彼はその土地の民によって瑞兆として受け入れられ、献身的に養育された。成長して、当時のシュレスヴィヒ、今日ではハイタブと呼ばれる町を統治するにいたった。その地域は古アングリアと称されている⁶³⁾。

『ベーオウルフ』の記述では海上を漂泊した幼童をシュルドとしていたのに対し、上記の年代記ではいずれも父シェアフ (シェーフ) の事績として語っている。より肝心な問題は、同じ幼童シェアフに関して、「武具に囲まれ」ていたとするエーゼルウェルドと、「頭のそばに穀物束が置かれていた」とするウィリアム・オヴ・マームズベリの記述の差異である。記録の上では後代の所産ながら、「麦束とともに漂着した幼童」という語りに注目したK・ミュレンホッフは、ウィリアムの記録内容をより原型的だとみなした⁶⁴⁾。しかしながら、従来の議論は、これを大きな相違であることを強調しすぎてきたと思う。両者の記述はさほど矛

盾するものではない。なぜなら、古き時代における「王者の理想像」に照らせば、王たる者は「兵力や戦闘力」を駆使して国土の平和と安寧を保持する役割があったことに加えて、「大地の豊饒」を司る呪術的な力を有する祭司長の役を担っていたからである。シェアフの傍らにおかれた「武具」は、勝ち取るべき「平和」の暗喩となりうる（拙論1998）⁶⁵⁾。息子の Scyld は「盾」を意味するから、武力と統治力のシンボルとなるが、より呪術的な力能としての豊饒を司る王 Scaef「麦束」とのあいだに血縁の紐帯を構築することによって、いやが上にも王権の神聖さが強調されているかに見える（水野2000）⁶⁶⁾。

「頭で穀物束が置かれて」おさなき君が漂着した季節は、収穫が終わって間もない秋季であると考えられる。そうすると、「凍てつきながらも、今にも出立せんとして」いたシュルド王葬送の船が、武具と宝物を満載して、港に停泊していた一季は、理念的には冬至の前後と考えてよいかもしれない。なぜならば、バルドルの葬送の時節もそうであったように、来るべき年の「豊饒と平和」を祈願し、同時に祖霊に対する minni「追悼礼」をも執行するには、その頃が絶好の期であろうから。

海と魂—人間創成の神話—

「巫女の予言」17-18節に、神々による人間の創成が歌われているが、先行する9-16節において侏儒族の創成と系譜が語られている。合計八個もの詩節が侏儒の記述に集中的に費やされているのは異様な印象を与えるが、人間の種族に先立ち、侏儒族がこの世に出現すべき何らかの要因があったのだろう⁶⁷⁾。

そこで支配神たちは、
 いとも神聖なる神々は、
 みなひとしく裁きの座に赴き、
 その一件で協議をかさねた。
 いったい誰が
 ブリミルの血と
 ブラーインの四肢の骨から、
 侏儒たちの族を造るべきかと。 （「巫女の予言」9）

「いとも神聖なる神々」が「裁きの座」に寄り集い、誰が侏儒たちの「族」または「集団」を造るべきか、と協議をこらしたという。ただし、侏儒の「族」(dróttir) はハック本に従った訳語で、写本の読みをそのまま採用して侏儒の「王」(dróttin) と訳し、つぎの詩節のモーズグニルと同一視する学者もいる⁶⁸⁾。ブラーインの leggr についても解釈が分かれており、「大腿骨」か「骨」一般を表わすという説⁶⁹⁾、あるいは「脛骨」と解く評者もいるが⁷⁰⁾、ここではアースラ・ドロロンケの訳語に従った⁷¹⁾。

ブリミルは多分に「波立ち騒ぐもの」の意で (brim「砕ける波」に関連か)、殺された巨人ユミルの別名と解されている。同様にブラーインも、形容詞 blár「青ざめた、青黒い」に関連づけられ、その頭蓋骨が蒼穹（天空）を形作ったという、あのユミルの別称と説くので

が一般的である⁷²⁾。

9節の前半の四行は、6節と23節および25節の前半部と同じ繰り返し句である。たとえば「年月の換算」の方法を決定したり(6節)、「アシルが罪科を負うべきか否か」を討議する(23節)、といった神界の命運を左右する重要な局面で、このリフレーションが用いられていることは注目に値する。同一のリフレーションをもった侏儒族の創成の語りもまた、ユミルの殺害と世界創成に続く、宇宙論的な意味を有するものとして捉えるべきだろう。端的には、次節にみるように、「人によく似た姿」をした多くの侏儒を造るといふ、神々の創造行為を導いている。

こうしてモーズソグニルが
ありとある侏儒のなかでも
最も高名を馳せる者となり、
それに続く者がドゥリンだ。
彼らは土をもって
かの侏儒たち、
いわば人の似姿を
数多くこしらえた、
ドゥリンが語ったように。 (10)

この記述によれば、jörðr「土」を用いて侏儒たちが造られたというのだが、その創作者であるはずの神々の名がここでは伏せてある。「彼ら」は、語りの流れに基づけば、ユミルを殺害したオージン、ヴィリ、ヴェーの三兄弟である可能性が高いが、不確かである。造られた多くの侏儒について、mann-líkan すなわち「人の似姿」といっていることが注目される。「彼ら」匿名の神々は、あたかも人間創成のための予備的な作業に関与しているかに見える。その場合、18節で紹介されるオージン、ヘーニル、およびローズルという三組神と、彼ら匿名神が同一であるとも解しうる。

スノッリの記録によれば、侏儒族は「大地や岩の中に住む」もの、あるいは「土の中に住む」ものなどに大別され、その他、スヴァリンスハッグ(「侏儒スヴァリンの墳丘」の意)から出て、アウルヴァンガル(「泥水の野」の意)に移動した侏儒族がいるという(「ギェルヴィの幻惑」14)。後者のAurvangar「泥水の野」はいかにも不思議な名称だが、Jöruvellir(「砂地の平原」の意)に位置するとされる。いずれの地名も詳細は不明だが、前者はユミルの別名Aurgelmirを想起させる(『生と死』55)。先述したように、ブリミル(波立ち騒ぐもの)とブラーイン(青き蒼穹)、すなわち殺された巨人ユミルの「血」と「四肢の骨」から創成された侏儒族は、海と天のエリメントと不可分であることを示唆している。いずれにせよ、一部の侏儒たちが、haugr「墳丘、塚穴」の中にあつた住居を捨て、AurvangarやJöruvellirの名に表徴されるように、とある水辺の地に移り住んだことを表わす伝承であろう。彼らが到達した「野」や「平原」の名称はいずれも複数形だが、単数形Aurvangrの第二要素vangrは、ゴート語waggsや古英語wangと同系であり、原義的には「水の豊かな光輝の野原」を意味し、古ゲルマンの樂園を表わす用語である(水野1984)⁷³⁾。また複合語

Jöruvöllr の第二要素 völlr についてもすでに卑見を提示したように、エッダ詩における16の用例を見ると、そのすべてが明示的または示唆的に「激闘、死、流血」のニュアンスをともなっている⁷⁴⁾。

また、近稿において用語 vangr の詳しい分析を進めた⁷⁵⁾。たとえばE・エルグクヴィストの精緻な研究によれば、ノルウェーにおいて、異教の神名*Ullinnが、 akr「耕地」や hof「異教の聖域」のほかに vangr「(牧)草地」と結びついた地名が幾つか認められる。Ullensvang という地名 (Hordaland 地方) は現代でこそ「教会敷地の周辺の野原」を表わしているが、より古くは「異教時代の民会の場」を指していたと解されている⁷⁶⁾。ちなみに古ノルド語 all-vangr は almanna-vangr の短縮形で、「全員が集う野原」を意味していた⁷⁷⁾。

このように völlr と vangr の意味と用法を確認してみると、ヨルヴェッリル (Jöruvellir「砂地の平原」) の中のアウルヴァンガル (Aurvangar「泥水の野」の意) に移り住んだ侏儒族についての不思議な伝承は (「ギェルヴィの幻惑」14)、やはり重要な意義を有するだろう。侏儒たちは、多分に神々の援助者として、やがて人間の種族が創成され、所定の「法」と「裁き」のもとに、その秩序ある共同体が形成されてゆくための予備的な作業に携わっていると読める。スノッリは、これらの侏儒の末裔に当たるものがロヴァルだ、と付記している。Lofarr は「称賛に値する者」または「名声を勝ち得た者」を意味しているが、その具体的な事績については不明である。

ふたたび「巫女の予言」の記述に戻れば、侏儒族の系譜をひと通り紹介したのちに、「人の世 (öld) が続くかぎり、ロヴァルの父祖の系譜が語られてゆくだろう」という言葉で締めくくられている。加えて、「人間の種族は、ロヴァルにまで系譜をたどることができる」と記されている。ここでいう侏儒名 Lofarr は、古ノルド語や古英語 lof「名誉」と関連がある。およそ真の勇士たるものは、「戦闘において永続する名誉 (lof) を勝ち取るためには、けっして己が命のことを心配してはならぬ」と叙事詩『ベーオウルフ』にも歌われている (1535-36)。戦士たちの最終目標は、まさしく生命を賭けて名声を確立するところにあった。たとえば勇者ベーオウルフがグレンデル退治を成しとげたとき、つぎのように称賛されている。

……　　かくしてベーオウルフの
 名誉は称えられた、　　多くの者がしばしば語った、
 南も北も、　　ふたつの海の間で、
 広大なる大地の上で、　　楯をもつ武人のなかで
 他のなんびとも　　広がる空の下で、
 王国を領有するに　　彼よりも優れたる者はいないのだと。　　(856-61)

したがって「巫女の予言」に記されたロヴァル「誉れ高き者」の出現は、人間社会における戦士集団の成立を先取りしていることになる。付言すれば、すでに指摘したように、勇者ベーオウルフが遂行した三種の「決闘の場」は、いずれも wang の用語をもって表現されている (拙論参照)⁷⁸⁾。古英語 wang が古ノルド語 vangr「民会の野」と同系であることは言うまでもないが、ロヴァルの父祖が Aurvangar「泥水の野」に移住したという伝承は、

まさに「決闘と民会の野」に隠れ住み、人間界の運命的な出来事に関与する、侏儒たちにまつわる信仰が存していたことを裏づけてくれる。こうして、侏儒族の発生を語った後に、巫女が人間創成を語り始めるのはいかにも自然の流れである。

これらの種族を離れて、
 ついには三名の力猛き、
 そして恵み深きアース神たちが
 居館をめざして進み出た。
 陸（海の辺）にて彼らは、
 アスクとエンブラという
 か弱きもの
 運命を知らぬものを見出した。 （「巫女の予言」17）

三人の神々が「居館（hús）をめざして」とあるからには、旅の帰路についていたときの出来事であろう。land「陸」にて「か弱き」アスクとエンブラ、「運命を知らぬもの」を見つけたという。ここでlandはlögr「海」の対立概念であり、おそらく海辺に流れ着いた二本の木から男女の人間が創成されたことを示唆している。アスクは、たとえば船または槍の柄の用材となる堅木トネリコ（askr）を表わし、エンブラについては異説もあるが、よく撓む弓材としての榆（almr）を意味していると解した方が無難だろう。それぞれ男女の肉体の剛と柔を表徴している。

彼らは^{いき}氣息を持たず、
 また魂もなければ、
 いのちの^{ぬく}温もりも、声もなく、
 またうるわしき容色もなかった。
 オージンが氣息を与え、
 ヘーニルが魂を与え、
 ローズルがいのちの温もりと
 そしてうるわしき容色を与えた。 （18）

ここではH・ゲリングの解釈に従い、láに「いのちの温もり」の訳語を与えたが⁷⁹⁾、「肉をおおうもの」の意味で「肌」と解する説がある⁸⁰⁾。オージンは「氣息」（önd）を、ヘーニルは「魂」（óðr）を、そしてローズルは生命の「温もり」（lá）と麗しき「容色」（litr）を、最初の人間となる彼らに与えたという。だが、「ギェルヴィの幻惑」9章では、「ボルの息子たちが海辺を歩いていると、二つの木を見つけ、その木から「人間を創った」とされ、「最初の者が息と命を与え、第二の者が知恵と動きを、第三の者が姿形とことばと聴覚と視覚を与えた」、などと記されている。そして、「男はアスク、女はエンブラと名づけられ、ミズガルズに住居を与えられた人間たちはこの者たちから生じた」と述べられている。

「ボルの息子たち」とあるからには、最初の者、第二の者、そして第三の者はそれぞれ

オージン、ヴィリ、ヴェーの兄弟神をさしている。人間に賦与したものに関して、「巫女の予言」の記述とは異なっている。しかし注目すべきことに、木の漂着した場所が「海辺」(sævar strönd)であることがより鮮明に打ち出されている。

J・ヴァイスヴァイラーによれば、古ゲルマン諸語において、「魂」を表わす用語(ゴート語 *saiwala* その他)は、「海」またはより古くは「湖沼」を表わす用語(ゴート語 *saiws*)と語原的に密接な関連を有していた⁸¹⁾。複雑な問題をはらんでいるが、簡略に言えば、ゴート語 *saiws* およびその複合語 *mari-saiws* が「内陸湖」を意味するのに対して、同系の古ノルド語 *sær* および *sjór* は「海、海洋」を意味する傾向が強い。ただし、後者の古ノルド語についても、「ヴォルンドの歌」の散文序にみるように、ほとんど例外的に *Úlf-sjár* 「狼湖」という用例もある。

ちなみに *Nordsee* 「北海」と *Ostsee* 「バルト海」(原義は「東方の海」)の呼称は、ヴァイスヴァイラーによれば、共通ゲルマンの所産ではなく、元来は「北海沿岸の住民」の間に限定された用語であったとされる。その一方では、*Bodensee* 「ボーデン湖」や *Tegernsee* 「テーゲルン湖」などの呼び名にもあるように、ドイツ語 *See* は男性名詞で「湖」、女性名詞で「海」を表わすことはよく知られている。総じてゲルマン祖語 **saiw-* は、「湖沼」がその古義であって、人々の移住や文化的な伝播にともない、比較的后代に「海」の意味を確定したとされる⁸²⁾。

さらなる詳しい議論は省略するが、古ゲルマンの「海と湖」の用語 (**saiw-*) は、ヴァイスヴァイラーによれば、極北ラップ人の「神聖」観念 *Saivo* と関連があると推定しうる。基本的には「死者の住む」海、湖、山、または岩など、また神霊的な存在とみられた「鳥、魚、蛇、トナカイ」などに、「聖性」を表徴する *Saivo* の用語が付されたのである。こうしてその結論を紹介すれば、「魂」(ドイツ語 *Seele*)の語末の *-le* は「帰属」の概念を表わし、魂は「海」または「湖」(ドイツ語 *See*)より発して、そこへと帰着するものと信じられていたという⁸³⁾。いわば海や湖は「魂の滞留地」であるという古代信仰がかつて存在していたとされる。

この視野に立てば、まさに「海辺」において人間が創成されたという北欧神話は、すこぶる重大な意義を有するだろう。人間創成を語る詩歌と散文のいずれの資料においても、オージンが *önd* 「息・命・魂」を与えたことでは一致している。*önd* は「人が死に、たとえ肉体が滅んでも生き続ける」ものとみなされていた(「ギョルヴィの幻惑」3)。神々が人間に下賜したものの内容については、スノッリの記述の方がより具体的である。いずれにせよ、三人の神々の協同によって最初の人間が創られたのだが、同じ三神すなわち「ブッルの息子たち」(「巫女の予言」4)によって巨人ユミルが殺されている。まさに好対照をなす神々の行為であるが、北欧神話において「創造と破壊」、「生と死」のテーマは、しばしば表裏一体の関係に置かれている(『生と死』46-60参照)。

宇宙創成神話においては、ユミルの「血」から「海」が出来上がったとされるが、その海は「魂の源泉」とみなされていた。そうすると、「海」の波に揺られ、浜辺に流れ着いた樹木から人間が創成されたというのであるから、人間も部分的には原古の巨人の *sveiti* 「血」をひいていることになる(『生と死』55と73)。ちょうど侏儒族の始祖も、ブリミル(ユミルの別名)の血と骨から造られたように。

古来より、死者は、海辺や川辺の地に葬られたが、後代には、船にて海のかなたに葬送されるか、もしくは船とともに大地に埋葬された。火葬であっても、遺灰や遺骨は水辺の地や、海の見える岬などに埋められた。いずれの葬法であるにせよ、「魂」(Seele)をその原郷なる「海や湖沼」(See)に送り返すという、原始から古代にかけて連綿と生きてきた信仰より発していると思う⁸⁴⁾。

補遺

小論の最後にひとつの問題提起をして今後の展望を企てたい。別稿で詳論したように、ベーオウルフの宿敵なる竜の住み処は海辺に位置し、wong と呼ばれている⁸⁵⁾。

	その塚穴は“広野”(wong)に
完璧にしつらえてあった。	海波の寄せるそばで、
岬に新しく造られていた。	匠(たくみ)の技をこらして堅固だった。
	(『ベーオウルフ』2241-43)

すでに論述した結論のみをここで紹介すれば、wong (または wang) の本来の概念は、「幸と富に恵まれ、光あふれ緑なす海辺(あるいは海のかなた)の原」あるいは「死と再生の広野」と定義できる⁸⁶⁾。また最近、古英語 grund (同系の古ノルド語 grunnr) の用例を検証し、古ゲルマン人が思い描いた「根の国」について卑見を提示した。彼らの世界観に照らせば、この世の大地の grund (基底)と、海や湖沼の「水底」にある「あの世」の grund は、「生命と豊饒の根源の地」として、いわば連続する「底根の領域」として把握されていた、と結論づけた⁸⁷⁾。したがって竜の占有地が、これらの用語の複合語として grund-wong 「地底の原」あるいは「根の国の広野」(2770)と呼ばれていることはきわめて注目に値する(拙論2001)⁸⁸⁾。

さて、既述したように、「鯨の岬」に築かれたベーオウルフの beorg 「墓塚」は、「岬」に造られていた竜の beorh 「塚穴」と奇妙な一致をみせていた。ベーオウルフの塚について、「工芸に巧みな者らが、その技量を尽くしてきわめて見事なる壁を張りめぐらした」(3161-62)と記されていたが、ここにみえる、「匠の技をこらして堅固だった」という表現語句と共鳴しているように思える。「宝環の守護者」(hringa hyrde) という呼び名に表徴されるように、竜は300年におよぶ莫大な財宝の占有者として描かれている。竜の住み処なる wong は、「幸と富に恵まれた海辺の原」という古時代の楽園表象をとどめていると考えれば、この事は容易に理解できる。

上の詩節において、古宝を蔵した「塚」が岬に「新しく造られていた」というのは、一見矛盾めいて聞こえてくるが、この描法も、やがて黄泉路をたどることになるベーオウルフのために、「新たに」造られる墳墓との相関関係を示唆しているのだろう。また別の箇所でも、ベーオウルフたち一行がめざす竜の住み処が wong と呼ばれ、「波浪の渦巻くところ」で、その地下には hlæw 「洞穴」があるなどと記されている(2408-12)。もはや言うまでもなく、財宝の秘蔵場所としての hlæw 「洞穴、塚穴」と、「鯨の岬」に造成されたベーオウルフの

hlæw「墳丘」が対応することは明らかだ。

ベーオウルフはいわば海辺の、とある岬の wong にて竜と相討ちとなった。それから、彼の遺体は「数え切れないほどの輪形の黄金」とともに「荷車に載せられ」て、鯨の岬へ運ばれてゆき (3136—36)、そして荼毘にふした後に、遺灰が hlæw「墳丘」に埋められている。

さて、Svarinshaugr「スヴァリンの墳丘」を離れて、Aurvangar（「泥水の野」の意）に移り住んだ侏儒族がいるという伝承があった（「ギュルヴィの幻惑」14）。これらの地名は不詳だが、それぞれの第二要素に着目すると、haugr は古英語 hlæw「墳丘」に意味上対応し、vangr（単数形）と wong は同系である。そうするとベーオウルフがその死の直後にたどられた経路は、これら侏儒族の移住の経路とは図式的に逆である。Aurvangar は Jöruvellir（「砂地の平原」）の中に位置し、また、これらの侏儒の末裔が Lofarr だとされる。先述したように、Lofarr は「名声を勝ち得た者」を意味し、「人の世 (öld) が続くかぎり、ロヴァルの父祖の系譜が語られてゆくだろう」と付言されている（「巫女の予言」16）。Jöruvellir の第二要素 völlr（単数形）が血で血を洗うような「激闘」のニュアンスをもっていることについては既に指摘した。

いわば、一部の侏儒たちが haugr「墳丘、塚穴」の中にあった住居を捨て、Aurvangar や Jöruvellir の名に表徴されるように、とある水辺の激戦の地に移り住み、そのことによって、Lofarr「誉れ高き者」を父祖に仰ぐ一族が生まれ出で、ロヴァルの名声は「人の世」があるかぎり子々孫々語り継がれたことになる。したがって、これとは正反対に、竜との「激闘」を繰り広げた wong「海辺の楽土」から、wæn「荷車」で鯨の岬の hlæw「墳丘」へと移動させられたベーオウルフは、勇士たちの最終目標としての「世代を超えて継承される名声（古英語・古ノルド語 lof）の獲得」とは無縁のところに追いやられたことを意味している。叙事詩『ベーオウルフ』の最終行に置かれた、「彼は“人の世” (wyruld) の王たちのなかでも……（中略）……最も名声 (lof) を追い求める者であった」という謎めいた一文は、それゆえ、その生涯についてつぎのようなことを示唆しているだろう。

彼ベーオウルフは、「榮譽 (mærdō) を求むることに執心し、若年の頃より常にそれを一大事と心得てきたが (1530行参照)、人が生き、また老いてゆく時代 (wyruld) を治める王者としては、後世にまで永続する名声 (lof) を勝ち取ることが出来なかった」、そして最期にはついに、「宝環の守護者」あるいはその占有者なる竜と同じ境遇に追いやられて、イエーアトの滅びの遠因を作ってしまったと。

*本稿は、国際シンポジウム「補陀落渡海」（奈良100年会館：2003年7月19日—20日）において、「漕ぎ手無き舟にて漂うて—船葬墓と北欧版うつぼ舟漂流譚—」と題して口頭発表した原稿（英文・和文）を基に、改訂と補整を加えたものである。

第一次資料

Dronke, Ursula *The Poetic Edda* : vol. II. *Mythological Poems*, Oxford UP, 1997.

Faulkes, Anthony ed., *Snorri Sturluson : Edda : Prologue and Gylfaginning*. Clarendon, 1982.

Hollander, Lee M. tr. *Heimskringla : History of the Kings of Norway*. 1964 : U of Texas

P, 1995.

Jónsson, Guðni. ed., *Eddukvæði*, I. Íslendingasagnaútgáfan, 1954.

Jónsson, Guðni. ed. *Edda Snorra Sturlusonar*. Íslendingasagnaútgáfan, 1954.

Klaeber, Fr. ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. 1922 ; D.C. Heath & Co., 1950.

註 :

- 1) Paul B. du Chaillu, *The Viking Age*. vol. 1, 1889 : AMS, 1970, 70-71.
- 2) J.M. Coles, & A.F. Harding. *The Bronze Age in Europe*. Methuen, 1979, 493.
- 3) du Chaillu, 84-85.
- 4) P.V. Glob, *The Mound People : Danish Bronze-Age Man Preserved*. Tr. Joan Bulman. Cornell UP, 1974, 17 & 27.
- 5) Glob, 129.
- 6) Haakon Shetelig & Hjalmar Falk, *Scandinavian Archaeology*. 1937 : Hacker Art Books, 1978, 151-52.
- 7) Fr. Klaeber, ed., 1950, Notes, 122.
- 8) Ole Crumlin-Pedersen, "Boat-burials at Slusegaard and the Interpretation of the Boat-grave Custom". In: *The Ship as Symbol in Prehistoric and Medieval Scandinavia*. Ed. Ole Crumlin-Pedersen & Birgitte M. Thye. Studies in Archaeology & History, vol. 1. The National Museum, Copenhagen, 1995, 87-99 ; 87.
- 9) Crumlin-Pedersen, 87.
- 10) Crumlin-Pedersen, 87.
- 11) Crumlin-Pedersen, 93.
- 12) Crumlin-Pedersen, 94.
- 13) Crumlin-Pedersen, 94.
- 14) Michael Müller-Wille, "Boat-Graves, Old and New Views". In: *The Ship as Symbol in Prehistoric and Medieval Scandinavia*. Ed. Ole Crumlin-Pedersen & Birgitte M. Thye. Studies in Archaeology & History, vol. 1. The National Museum, Copenhagen, 1995, 101-10 ; 106.
- 15) 主として次の4編の論稿。(1)水野知昭, "Loki as a Terrible Stranger and a Sacred Visitor". 『人文科学論集』 <文化コミュニケーション学科編> (信州大学人文学部) 第30号 (1996) : 69-90. (2)水野「古北欧の「流され王」伝説」『The Round Table』13 (慶応義塾大学:高宮研究室, 1998b) : 135-46. (3)水野「海原を渡り来るおきな君:古北欧のマレビト」『古今東西のおきな神』篠田知和基 (編) (名古屋大学文学研究科, 2000) : 183-90. (4)水野「民会と決闘の野原—古ノルド語 *vangr* と *völlr* および *leikr* の考察—」『言語学論集』17 (2002c) : 17-33.
- 16) 水野2000, 184-89.
- 17) 水野「古北欧の「中つ国」と「根の国」」『人文科学論集』 <文化コミュニケーション学科編> 35 (信州大学人文学部, 2001a) : 93-119.
- 18) Anthony Faulkes, ed., *Snorri Sturluson : Edda : Prologue and Gylfaginning*. Clarendon, 1982.
- 19) 水野知昭『生と死の北欧神話』松柏社, 2002a. 第六章「殺されたバルドル」185-237. 水野「神々の犠牲者としてのバルドル—「北欧マレビト考」への序章—」『日本大学工学部紀要 分類B』27 (1986) : 97-112. 水野「「バルドル神話劇」前編」『エポス』10号 (1987) : 27-45. その他多数.

- 20) E.O.G. Turville-Petre, *Myth and Religion of the North: The Religion of Ancient Scandinavia*. Greenwood, 1964, 96-97.
- 21) Guðni Jónsson, ed. *Edda Snorra Sturlusonar*. Íslendingasagnaútgáfan, 1954.
- 22) Bjarni Aðalbjarnarson, ed. *Heimskringla*. Bd. I, Íslensk Fornrit XXVI, 1941, 167-68. なお、このテーマについての拙論参照。水野「王の犠牲と豊饒—北欧と日本とギリシアの事例—」『人文科学論集』32 (1998a) : 89-197.
- 23) 水野知昭「求愛の使者スキールニルの旅—フレイとバルドルを繋ぐもの—」『日本アイスランド学会会報』20 (2001c) : 22-35 ; 32.
- 24) Rudolf Simek, *Dictionary of Northern Mythology*. tr. Angela Hall. D. S. Brewer, 1993. 227.
- 25) 水野知昭「恐るべき母としてのフリッグ」『冥界の大母神』篠田知和基 (編) (名古屋大学文学部, 1999) : 7-14.
- 26) Joseph Fontenrose, *Orion: The Myth of the Hunter and the Huntress*. U of California P, 1981. 211 ; 245.
- 27) Maarten J. Vermaseren, *Cybele and Attis*. Thames & Hudson, 1977, 22.
- 28) 水野1999, 11.
- 29) Klaeber, ed.
- 30) Richard North, *Heathen Gods in Old English Literature*. Cambridge UP, 1997, 195.
- 31) Ynglinga saga, in : Bjarni Aðalbjarnarson, ed. *Heimskringla*, Bd. I, 1941.
- 32) North, 195.
- 33) 水野知昭「『巫女の予言』にみる運命と月の思想」『生と死の神話学』, 松村一男 (編) (リトン, 2004) 刊行予定.
- 34) Johannes Hoops, *Kommentar zum Beowulf*. Carl Winter, 1965, 8.
- 35) North, 194.
- 36) James G. Frazer, *The Golden Bough*. Abridged ed. 1922 ; Macmillan P, 1960, 353-54 ; 385. および拙論参照 : 水野, 1998a : 89-197.
- 37) 水野2001a, 97.
- 38) Tomoaki Mizuno, "Beowulf as a Terrible Stranger". *The Journal of Indo-European Studies*. 17, No. 1 & 2 (Washington D.C., 1989) 1-46 ; 38.
- 39) Mizuno 1989, 36.
- 40) 水野知昭「異人による聖戦としての竜蛇退治—力の勇者ベーオウルフとソールを中心に—」『鬼とデーモン』篠田知和基 (編), 名古屋大学文学研究科, 2001c, 103-19, 116.
- 41) 水野2001b, 25-26.
- 42) 水野2001b, 26.
- 43) 中田祝夫・和田利政・北原保雄 (編) 『古語大辞典』 (小学館, 1983) 77.
- 44) 水野2001b, 27.
- 45) 水野知昭「Beowulf の冥界下降—その起源への一考察—」『試論』17 (東北大学英文学研, 1977) : 17-32.
- 46) Jan de Vries, *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch*. 1962 ; E.J. Brill, 1977, 221.
- 47) 水野2001a, 104.
- 48) 古北欧の「流され王」ならびに「海原を渡り来るおさな君」に関する拙論参照 : 水野1998b ; 水野2000. 柳田国男「流され王」『定本柳田国男集』筑摩書房, 1962 : 259-68.
- 49) R. W. Chambers, *Beowulf: An Introduction to the Study of the Poem*. 1921; Cambridge UP, 1959, 68-86.

- 50) 水野知昭「古北欧の太陽舟と太陽馬車の信仰」『世界の太陽神と太陽信仰』II. 渡辺和子・松村一男(編)(リトン, 2003a):247-82;253.
- 51) 「神をはぐくみ申す者」という折口の用語を古北欧の文献解釈に適用した拙論参照:水野1998b, 136. 折口信夫「小説戯曲文学における物語り要素」『日本文学の発生序説』1943;角川書店, 1975:103-06.
- 52) 水野2000, 184.
- 53) North, 193.
- 54) North, 193.
- 55) 水野1998b, 140.
- 56) 水野1998b, 139-44. 水野2000, 188-90.
- 57) 水野1998b, 140-42.
- 58) Stephen Pollington, *Rudiments of Runelore*. Anglo-Saxon Books, 1995, 50.
- 59) 水野1998b, 142-43.
- 60) 水野1998a, 94-95.
- 61) Frazer 1960, 353 & 385.
- 62) 水野1998b, 136-37.
- 63) Chambers, 70-71.
- 64) Chambers, 75.
- 65) 水野1998b, 140.
- 66) 水野2000, 184.
- 67) 水野知昭「「巫女の予言」抄訳と略註」『神話・象徴・文学』II. 篠田知和基(編)(楽浪書院, 2002b):27-54.
- 68) Hermann Pálsson, ed. *Völuspá: The Sybil's Prophecy*. Lockharton, 1996, 65.
- 69) Hugo Gering, ed. *Glossar zu den Liedern der Edda*. Ferdinand Schöningh, 1907, 111.
- 70) Pálsson, 66.
- 71) Dronke, 9.
- 72) Simek, 44 & 38.
- 73) 水野「古ゲルマンの楽園の原風景」『文化』47, 3・4号(東北大学文学会, 1984):328-50;333. なお、「海のかなたの楽園」については近稿でより詳しい分析を試みた。水野「不死鳥の歌なんか聞こえない—海のかなたの楽園と古ゲルマンの選民思想—」『人文科学論集』〈文化コミュニケーション学科編〉36(2003b):39-66.
- 74) 水野2002c, 21.
- 75) 水野2002c, 17-19.
- 76) Eric Elgqvist, *Ullvi och Ullinshov: Studier rörande Ullkultens uppkomst och utbredning*. Olins Antikvariat, 1955, 26.
- 77) R. Cleasby & Guðbrand Vigfusson, eds. *An Icelandic-English Dictionary*. 1874; Clarendon, 1975, 678.
- 78) 水野2001c, 111-14.
- 79) Gering, 118.
- 80) Dronke, 124.
- 81) Joseph Weisweiler, “Seele und See: Ein etymologischer Versuch”. *Indogermanische Forschungen* 57 (1939-40): 25-55.
- 82) Weisweiler, 30.

- 83) Weisweiler, 32-33 ; 49-50.
- 84) 風, 海波, および火のエリメントと魂の連関, さらには後期青銅器時代において火葬が普及した理由については拙稿参照. 水野知昭「風, 海そして火の神ニョルズ」『エポス』7 (エポス同人会, 1982) : 36-55.
- 85) 水野2001a, 111-14.
- 86) 水野1984, 333.
- 87) 水野2001a, 116.
- 88) 水野2001a, 111.